

研究題目

生徒会活動を中心とした自治的能力の醸成と自律の実現 ～ ICT機器を活用し自ら考え行動する生徒の姿～

目 次

- 1 未来を生きる子ども達に必要な力とは
 - (1) 経済構造の変化
 - (2) 沖縄県の施策方針
 - (3) 本校の教育指針
- 2 具体的な実践
 - (1) ICTを活用した双方向の「生徒総会」
 - (2) 問題点を見つけ、解決策を模索する「校則改正」
 - (3) 全ての生徒に活躍の場を提供する「生徒会行事」
 - (4) 成果と課題を共有する「小中合同研修会」
 - (5) ピンチをチャンスにする「平和学習」
- 3 実践の成果
 - (1) 生徒の自己評価
 - (2) 講師が「生徒」の職員研修
 - (3) メディア掲載と他地区の学校との交流
- 4 今後の課題
 - (1) 外部からの情報収集による生徒のメタ認知能力の向上
 - (2) 継続的な実践に向けた土台づくり
 - (3) 教員の支持的風土づくりと子ども達の学習観の転換
- 5 参考資料

沖縄県那覇市立城北中学校 校長 仲盛 康治
教諭 林 達也

1 未来を生きる子ども達に必要な力とは

(1) 経済構造の変化

現在、AIやIoTなど科学技術の進展は著しく、経済構造は大きく様変わりしている。社会は凄まじいスピードで変化しており、10年先はおろか、5年先でさえ、先行きを見通すことが難しい。このような時代の潮流にあっては、ますます大切になるのは、自ら考えて判断し行動する「自律」と「自治」の力ではないだろうか。これは言い換えると、「社会を生き抜いていく力」つまり社会への適応力とも言える。では、社会への適応力とはどのようなものを指すのだろうか。それは、定量化しづらい「非認知スキル」とも呼ばれるものである。例として、①課題発見力②試行錯誤を続ける力③メタ認知力などの数字では測れない力などが挙げられる。更に、これらの力は「情報活用能力」「人を動かし巻き込む力」「ゼロから価値を生み出す力」「感情をコントロールする力」などに細分化することもできる。予測不可能な未来を子ども達が生き抜くためにも、自ら考えて行動する「自律」と「自治」の力を育むことが今日の学校教育で一層重要視されていると考える。

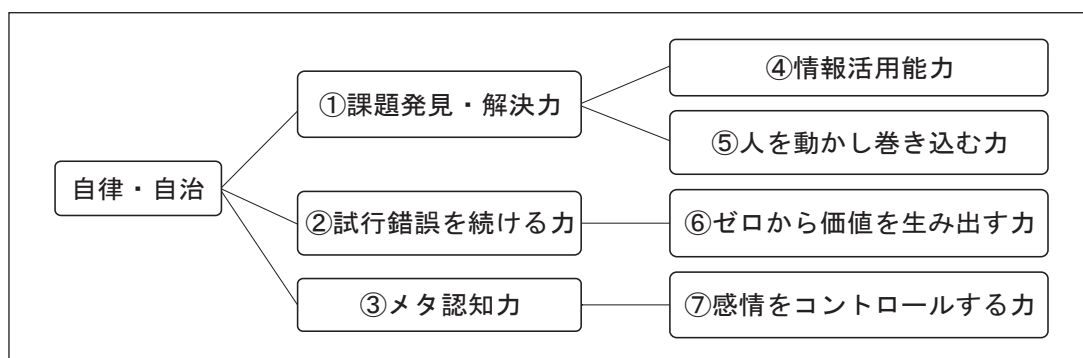


図1. 未来を生きる子ども達に必要な資質・能力

(2) 沖縄県の施策方針

このような背景から、沖縄県でも上記図1に代表される資質・能力を育むことを目的とした、様々な教育施策が展開されている。本県では、上記の力をあわせ持つ子ども達を「学びに向かう集団」と表現している。右の図2は「R4沖縄県版 魅力ある学校づくりパンフレット」の一部である。ここでも、子ども達が中心となる自律的・自治的活動の推進が求められていることが読み取れ、その一つの手立てとして、生徒会活動の充実が掲げられている。生徒会を中心とした取り組みを展開することにより、子ども達一人ひとりの主体性や他者への貢献意欲、問題解決能力を高めることができるとしている。



図2. 生徒会活動の充実と主体性の向上

(R4沖縄県版魅力ある学校づくりパンフレット抜粋)

(3) 本校の教育指針

沖縄県の方針を受け、本校でも生徒会を中心とした様々な取り組みを展開している。その際、問題解決のツールとしてICTを積極的に活用させ、生徒が自らの力で問題を解決する過程で、「自律」と「自治」力を高めていく実践研究を行なっている。本校の掲げる研究仮説は以下の通りである。

生徒がICTを効果的に活用することにより、生徒会活動に情報の双方向性が生まれるとともに、生徒一人ひとりの「自律」と「自治」の力を高めることができるだろう。

(ア) 目指すべきゴールとビジョンの共有

上記の研究仮説を実証していくために、本校が行ったことは職員と生徒のビジョンの共有である。本校には二つのビジョンが存在する。一つ目は、職員の共有ビジョンである。それは、「心ひとつに 誰かの笑顔のために 明日が待ち遠しい学舎」を実現することである。この共有ビジョンは各教室に張り出し、職員がいつでも確認できるようにしている。二つ目は、生徒の共有ビジョンである。それは、「誰かのために 自ら気づき 考え行動する」生徒を目指すことである。これら二つのビジョンは、立場は違うが、一貫性が保たれている。それは、職員も生徒も誰か(他者であれば、生徒でも職員でも構わない)のために考え、主体的に行動するといった「自律」と「自治」が求められている点にある。

(イ) 生徒会総務の役割

上記の生徒共有ビジョンを具現化するために、人前に立ち、率先して行動を起こすのが本校生徒会総務(以下、総務)の役割である。そしてこの取り組みを通して、リーダー(生徒自身)が学校全体の「自律」と「自治」を形づくり、生徒一人ひとりの主体性や問題解決能力を高めることを目指している。

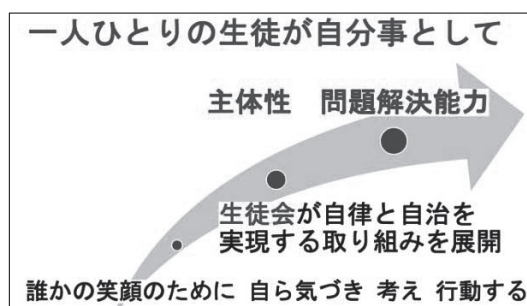


図3. 生徒会の取り組みイメージ

図3は、そのイメージである。その際、一部のリーダーだけでなく、全ての生徒が自分ごととして考えられるようにすることを忘れてはならない。それを実現するためのツールがICTである。生徒が主体的にICTを駆使し、様々な場面で自由に活用することで総務とそれ以外の生徒の間で情報が行き来するのである。本校では、Google Classroomを主軸として、それに付随するアプリを全校生徒で活用し情報の双方向を実現した。

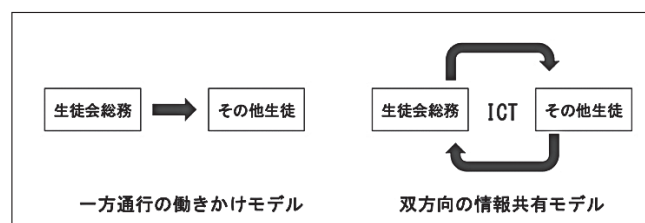


図4. ICTを活用する利点(情報の双方向性)

2 具体的な実践

本校の総務がICTを活用し、生徒の「自律」と「自治」の力を高めるために実施した具体的な取り組みを記述していく。なお、総務が実践した5つの取り組みは、それぞれ求められる力が異なっている。下の図5は、各取り組みと資質・能力の対応表である。また、朱書きの部分は、その実践で主に伸ばしたい力を示している。見てわかるように、多くの実践で④情報活用能力が求められていることがわかる。この対応表は生徒が作成したものであり、実践を行う前には、生徒自身が企画書を作成し、その取り組みでどのような力を伸ばしていくのかを明確にしている。図6は実際に生徒が作成した企画書である。本校では、この企画書を実際に職員会議にかけ、学校行事の立案から生徒を携わらせている。

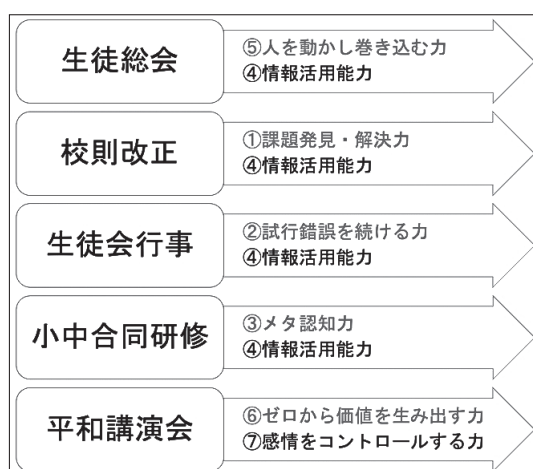


図5. それぞれの実践で育む力

令和（ ）年度（ ）期 総務 企画書			
メンバー	議題： 異校 交流	議題者	生徒会
企画の目的	本校の行事の企画・運営、各学級の行事の企画・運営、		
目標	4月20日（金）	場所	体育館
実施内容	本校の行事の企画・運営、各学級の行事の企画・運営、		
実施場所	本校体育館		
実施日時	4月20日（金）		
実施者	生徒会		
実施場所	本校体育館		
実施日時	4月20日（金）		
実施者	生徒会		
実施場所	本校体育館		
実施日時	4月20日（金）		
実施者	生徒会		
実施場所	本校体育館		
実施日時	4月20日（金）		
実施者	生徒会		

図6. 生徒会が作成した企画書

(1) ICTを活用した双方向の「生徒総会」【⑤人を動かし巻き込む力】

生徒総会は何の学校でも行われている学校行事の一つである。しかし、その生徒総会の立案から運営までを生徒だけで創り上げる学校を多くはない。担当職員がシナリオや議案書を準備し、生徒にセリフを言わせ、決められた線路の上を辿っていく生徒総会を見聞したことがある。本来、生徒総会とは、より良い学校を生徒自身が創り上げていくために全校生徒で協議し、決定する限りなく「自律的」で「自治的」なものであるはずである。そこで本校では、生徒総会の立案から運営まで、文字通り生徒のみで行う取り組みを行っている。まず本校の総務は、生徒総会の意義を伝えるために、朝の会に各学級に入り、その意義についてプレゼンテーションを行った。もちろん、そこで使用した資料も生徒が一から作成したものである。また、各クラスから意見を抽出する学級討議も生徒一人ひとりに問題意識を持たせるため、総務が各学級の担任の代わりとなり、学級討議が円滑に進むように支援を行った。図7の写真を見ても教師が黒板の前に立っておらず、生徒が主体的に討議を進めていることが窺える。



図7. 学級討議の様子

図7の写真を見ても教師が黒板の前に立っておらず、生徒が主体的に討議を進めていることが窺える。

その他にも、議案書の作成と印刷、各委員会への資料の作成依頼と回収、予算の分配、当日のシナリオの作成や役割分担の決定など、考えられる業務の全てを生徒自身でとり行った。さらに、本実践で最も特徴的なのは、生徒同士の情報のやりとりの全てをGoogle Classroomを活用して行った点にある。図8は実際のやり取りの様子である。このように、総務からの指示や会議の記録、各委員会からの質問や連絡は全てオンライン上で行い、教師を介さなくても情報がやりとりできるような環境を整えた。



図8. Google Classroomの効果的な活用

加えて、各委員会の活動報告や予算案の作成に関しては、Google スライドやGoogle スプレッドシートを活用した。この他にも総会で必要な資料の全てをオンライン上で作成した。この方法の利点は、何よりも生徒同士で情報を簡単にやり取りできる点にある。この点が、情報活用能力の育成につながっていると言える。さらに、生徒総会当日は、Google Meetを活用しオンラインで実施した。総会の中で最も際立っていたのは、総務が自主的に行なった校則改正に関する提案である。これは、全ての生徒に生徒総会を自分ごととして捉えてほしいという思いから始まったものである。まさに、この部分が「自律」と「自治」に繋がっており、「人を巻き込み動かす力」の表れである。右の写真は、今年度の生徒総会の様子である。各教室でのオンラインの開催ではあったが、積極的な意見の交換がなされていることが窺える。



図9. オンライン生徒総会の様子

(2) 問題点を見つけ、解決策を模索する「校則改正」【①課題発見・解決力】

(ア) 問題の把握と目的の明確化

生徒総会で総務が提案した校則改正は、生徒の「自律」と「自治」の力のうち、「課題発見・解決力」を高めることも目的として実施している。上でも述べたように、この取り組みは生徒の声から始まったものである。まず、「校則を変える意義は何か」「校則の何を变えたいのか」を明確にするため、総務で話し合いを行った。

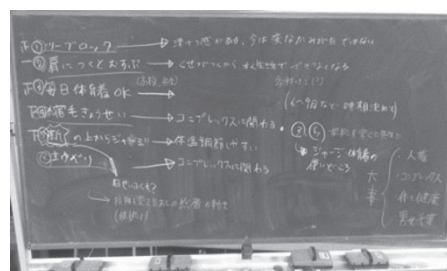


図10. 会議の記録

その結果、髪型や身だしなみに関する校則（以下「校則」）が、現代の社会の風潮に合っていないのではないかとという考えに至った。図10は、その時の会議の記録であり、目の前に存在する課題を明確化している様子が窺える。次に、校則改正を行う目的を全校生徒に示すために、校則を変えることによって何が得られるのかを整理した。これは、社会で尊重されていることと校則を照らし合わせたときの価値の違いを見つける作業であるとも言える。その結果、「①一人ひとりの人権尊重」「②男女平等」「③コンプレックスの解消」「④心身の健康保持」の四点において校則改正の意義を明らかにした。

（イ） 方法の決定と承認（職員に向けたプレゼン）

「校則の改正は生徒のみで行うことはできない。必ず、先生達の理解が必要である。」これは本校の総務による話し合いで行き着いた結論である。そこで、生徒は、校則改正を実現させるために、どのような手法を取れば、教職員の賛同が得られるのか協議を重ねた。その結果、県内の高校や企業から情報を集め、そこで得られたデータを根拠に校則の改正を提案するといった方法にたどり着いた。つまり、その校則の意義や是非を学校の中だけの価値観で判断するのではなく、進学先や就職先を含めた、より広い視野で、判断するといったものである。

図11は、実際に生徒が作成した校則改正の流れである。まず、全校生徒にアンケートを実施し、そこから校則に関する疑問を抽出する。次に、本校の進学状況を考慮し、どの高校や企業にヒアリングするかを代表生徒で決定する。そして、疑問の上昇した校則について、進学先や就職先でどのように受け取られているのかを実際に調査を行っていくのである。この時、幅広い視点から情報が得られるように、県内の高等学校のうち、近隣校から進学校まで特色の違う6校から情報を得ることになった。また、企業においても、「サービス」「飲食」「IT」「医療」「公務員」と様々な業種から情報を得て、社会から見たときの、その校則の妥当性を総合的に判断することになった。生徒は、この取り組みの承認を得るために、職員に提案する場を設定した。その際、「徐々に活動の輪を広げた方が、先生達の理解が得られやすのではないか」という意見が出たため、「生徒指導部」「企画委員会」「全職員」の3回に分けてプレゼンを行うことにした。その結果、見事に職員の承認を得ることに成功したのである。このように、目の前にある課題を解決するために、どのような方法があるのかを考え、生まれたアイデアを実際に行動に起こす姿からも、生徒の「自律」や「自治」の力が高まりつつあることが窺える。


<p>手順</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全校生徒にアンケートを実施する。 2. 出てきた疑問を代表メンバーで2,3個に絞る。 3. 絞った疑問について高校や企業がどのような印象を持っているのか調査する。 4. まとめた内容について全校生徒にアンケートを取り、合意を得る。(最終決定) 5. 先生方にプレゼンを行う。
<p>今後の予定</p> <p>代表メンバーでの話し合い(7月28・29日) 絞った校則について高校や企業に問い合わせ(8月) 話し合いの内容、問い合わせた結果をまとめた資料の作成(9~10月) 最終決定のアンケート作成・実施(11月前半) 決定した内容について先生方にプレゼンを行う(11月) 以上を目標に頑張ります。</p> 

図11. 校則改正の流れ

(ウ) 全校生徒へ向けた働きかけ

職員の承認が得られた後に、本校の総務が行ったことは、全校生徒へ校則改正の周知とその意義の説明である。この取り組みは、時数やカリキュラムの問題で、朝の時間や授業内で取り扱うことができなかったため、生徒は、給食の時間を活用し、放送室から各教室の電子黒板にスライドを映し出し、オンラインで説明をすることを企画した。図12はその時に、総務が作成した資料である。ここで、興味深いのは、単に校則を変えることが目的ではなく、その先に「自由」や「コンプレックスの解消」といった「人権尊重の精神」があることも明示したことである。つまり、校則の改正は「人権尊重」や「コンプレックスの解消」といった上位目標を達成するための手段であって「目的」ではないことを生徒が理解していたのである。さらには、校則改正には全校生徒の協力が必要不可欠であることや、変えたからには「責任」が伴うということが生徒自身の言葉で語られていた。このことから、生徒の「自律」や「自治」の力が高まり、「人を動かし巻き込む力」が育成されていることが見とれる。

その後は計画通り、全校生徒の校則に関する疑問点を調査する取り組みを行った。この時、一人ひとりの生徒から素直な意見を得るために、ICTを活用してアンケート調査を実施していた。図13は、実際に生徒が作成したGoogle Formsの様式とその調査結果の一部である。もちろん、アンケートの集計や結果の分析も全て生徒自身で行っている。この取り組みは今も進行中で、現在は進学先や企業から情報を集めている段階にある。生徒は、「12月までには、校則を変えてみせる」と強く意気込んでいる。引き続き支援を行い、生徒の「課題発見・解決力」を高めていきたいと考えている。

校則改正の意義とは

自由な環境へ...

- ・自分らしい生活を送ることができる
- ・コンプレックスの解消

➡より楽しい学校生活を送ることにつながる

校則を改正するには生徒一人ひとりが考えて行動することが大切!!!

Point

校則の改変に伴い、自由とともに責任も発生する!

↓

責任を持った行動をしないと、せっかく改正した校則がもとに戻されてしまうということが起こりかねない!




図12. 全校生徒向けのプレゼン資料

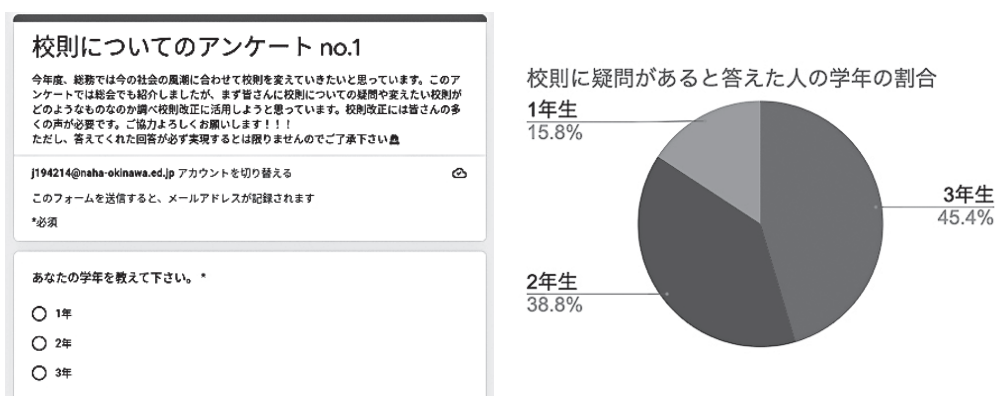


図13. 生徒が作成したアンケートとその結果の一部

(3) 全ての生徒に活躍の場を提供する「生徒会行事」【②試行錯誤を続ける力】

本校には、行事の企画から運営までの全決定権を総務に与える生徒会行事が存在する。この行事は、例年運動場で全校生徒を一堂に会して行われていた。しかし、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で同様の方法による実施が難しくなった。

そこで総務と話し合いを行い、どのような形態であれば、実施できるのか解決策を考えた。その時、生徒には大事にしてほしい価値が三つあることを伝えた。一つ目は、全ての生徒が楽しめること。二つ目は、多くの生徒に活躍の場を提供することである。学校には、運動や勉強に対して得意不得意を持った様々な子が存在する。総務に考えさせたかったのは、それぞれの生徒の視点に立ったときの気持ちである。その結果、生徒からは、「教室と教室をオンラインで繋ぎ、レクに参加してもらおう」「運動系と勉強系の種目を作ろう」という案が出た。本校は、一人一台ずつChromebookが配布されている。この環境を利用し、教室の中でも楽しめるレクを企画した。図15は勉強系種目の一つである「城北クイズ」で使用したGoogle Formsである。生徒は、自身のタブレットから解答を送信する。その結果をリアルタイムで集計し、順位づけを行うのである。参加している生徒も、密にならないように心がけ、問題を解いている様子が見られる。今年度の生徒会行事の開催にあたっては、

ICT活用の理由

- ・コロナの感染拡大防止(会場の分散)
→県大会を控える部活もあるため
- ・結果の集計が楽にできる(スプレッドシート使用)
- ・会場が離れていても団での協力を必要とした競技ができる

図14. 生徒会行事の意義

第1問 校長先生の服の色は何色だったでしょう？	1ポイント
回答を入力	
第2問 校長先生が最後に言った言葉は何？	1ポイント
回答を入力	
第3問 宮園先生の出身地はどこでしょう *漢字で書きなさい*	1ポイント
回答を入力	



図15. 城北クイズの問題と生徒が問題を解いている様子

方法から時期の決定に至るまで、生徒のみで約2ヶ月間の検討と協議を重ねた。しかし、行事を進めていく中で放送機器やICTなどの様々なトラブルに見舞われ、多くの課題が残ったのも事実である。そのような時も、生徒が自分達力で行事を創ることにこそ、意義があると考えたため、自身の力で解決するように促した。生徒はその度に、解決策を考え、粘り強く取り組んでいる様子が伺えた。失敗の経験も生徒にとっては貴重な財産である。何より、行事後の反省会では、課題と成果を自分達でまとめ、この経験を次に活かそうとしている様子が強く見られた。このことは、「試行錯誤を続ける力」の高まりを表しているといえるだろう。生徒は、この一連のプロセスを通して、その後の人生で何度も繰り返し発揮することのできる大切な力を学んだのだと考える。

(4) 成果と課題を共有する「小中合同研修会」【③メタ認知力】

本校の総務は、一つの取り組みを終える毎に反省会をひらいている。この反省会は、生徒のみで行われ、話し合われた内容は記録簿にまとめられ、翌年度の資料として保管される。生徒は、この反省会を通して、「目標に対しての成果や課題は何か」「その目標を達成するため手段は適切であったか」などの振り返りを行っている。この反省会の目的は、生徒のメタ認知の力の向上にある。自分達で成果や課題を考える活動を繰り返し行うことで、生徒の内省する力は飛躍的に向上すると考えているのだ。

夏休みの直前に行われた生徒会行事も他の行事と同じように反省会を実施した。反省会を終えた後、生徒からそこで話し合われた内容を聞いた時、あまりにも的を離れた振り返りにとても驚いた。また、教師でも見逃してしまうような小さな課題にも真摯に目を向けている姿が見られた。生徒のメタ認知の力が向上し、立派に成長を遂げていることに誇りに思ったと同時に、この様子を多くの職員に共有したいと強く感じた。そこで、これまでに総務が取り組んだ行事の成果や課題を職員に発表する場を設けようと考えた。例年、夏休みの初めに首里地区の小中学校職員が集まり、合同研修会が行われる。今年は、その研修会に城北中学校の総務による成果報告の場面を設けたのである。図16は、その時に生徒が作成したスライドと実際の様子である。



<h3>意義と目的</h3>  <p>コロナ禍でも学年の枠を超えた交流 →異学年との親睦を深める 一人ひとりが活躍できる場を作る 県中体連激励会も決意表明の動画を用いて行った</p>	<h3>成果</h3> <p>総務での成果</p> <ul style="list-style-type: none">ポスターをChromebookで作成したことで競技の仕掛けに使うことができた。会場を各クラス(13個)に分けて行った経験 <p>学校、生徒の成果</p> <ul style="list-style-type: none">クラスの中で様々な人が活躍していた完全にオンラインで繋いだのは初だった団の中での交流
<h3>課題</h3> <ul style="list-style-type: none">競技間のClassroomの移動がスムーズじゃなかったmeetへの参加が遅かった→級長さんへChromebookと電子黒板の接続方法の講習会を実施する競技と競技の間で結果の打ち込みをするはずが、時間が足りなくて負担になった。→結果をメモしておいて一斉に結果を打ち込む時間をつくる(デジタルとアナログの使い分け)	

図16. 小中合同研修会で提示した資料と実際の様子

上のスライドからも分かるように、それぞれの取り組みの意義や成果、課題が正確に分析されていることが読み取れる。研修会に参加した、本校の職員や小学校時代の担任の先生も生徒の正確な分析と理路整然とした発表にとても驚いている様子であった。発表後、生徒は「自分達の考えをうまく伝えることができました」と笑みを浮かべながら語っていた。このように、自分達が振り返った内容を資料にまとめ、自らの言葉で発表することにより、生徒のメタ認知の力は一層高まると考える。さらに、多くの職員がその取り組みを前向きに評価することで、生徒に達成感を与え、自己肯定感や有用感の向上に繋がると考えている。

(5) ピンチをチャンスにする「平和学習」【⑥ゼロから価値を生み出す力】

その他にも本校の総務は、様々な職員と主体的に連携し行事の運営に携わっている。これは、自分達の役割だけをこなすのではなく、積極的に他者と関わり、新たな価値を生み出す過程を体験的に学びたいという思いから行われている。そのため、生徒は、生徒会担当の職員以外とも積極的に関わりを持つように心がけている。それを理解している職員も、様々な場面で総務に協力を依頼している。その一つとして、平和担当の職員と総務が連携して創り上げた平和学習が挙げられる。当初、今年の平和学習は、近隣の慰霊碑を訪れるフィールドワークを計画していた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、予定を変更せざるを得なくなったのである。そこで、平和担当の職員が総務とコラボレーションをして、一から新たな行事を創り上げる事になった。元々の予定では、地域住民を講師に招き、現地で慰霊碑についてお話をいただく予定であった。そのため、新たに提案する平和学習においても地域住民との関わりは最重要のポイントとなる。それを踏まえて、生徒会総務が話し合いを行ったところ、「全ての生徒が同時に慰霊碑を訪れることができないことを逆手に取ろう」という案が浮上した。具体的には、代表生徒が地域住民と一緒に現地に向かい、その様子を撮影して各教室で放映するというものである。また、「TV番組みたいにナレーションがあると分かりやすい」「アナウンサーがいたら面白いのでは」「校長先生にも出演してもらおう」といったアイデアがどんどん出てきた。そこで、生徒会総務からアナウンサーとナレーション役を選出し、本物のTV番組さながらの台本を用意し撮影を行った。平和担当の職員も生徒の思いを汲み取り、編集作業を熱心に行った。平和学習当日は、各学級で動画を視聴したが、どの生徒も釘付けになっていた。この取り組みには二つの成果があると考えられる。一つ目は、平和学習としての成果である。講師に地域住民を招き、実体験を踏まえた生の声を生徒に届けることができた。また、学校の近くに貴重な文化財(慰霊碑)があることにも気づかせることができた点で非常に価値のある平和学習であったと考える。二つ目は、ピンチを逆手に取り、職員と生徒が協働して新たに価値のあるものを生み出すことができた点にある。コロナというピンチがなければ、この平和学習は生まれていなかったであろう。生徒の柔軟なアイデアによって非常に魅力的な行事が創られた事例である。まさにこの過程こそ、生徒の「ゼロから価値を生み出す力」の育成そのものであったと考える。このユニークな取り組みは、県新聞(琉球新聞)にも掲載された。

3 実践の成果

(1) 生徒の自己評価

上記の取り組みが生徒にどのような影響を与えたのか調査するため、本校の総務を対象にアンケート調査を行った。(N=12) 質問は以下の5項目で行い、「自律」と「自治」に関する力がどの程度高まったかの視点で自己評価している。なお、アンケートの実施においては普段生徒が使用しているGoogle Formsを活用した。

表1. 生徒への質問項目

1	活動を通して情報を活用する力が高まった。
2	仲間と協力し粘り強く活動を行うことが高まった。
3	他者に自分の考えを伝えたり、多くの人を巻き混んだりする力が高まった。
4	成果や課題を分析する力が高まった。
5	自ら考えて主体的に行動する力が高まった。

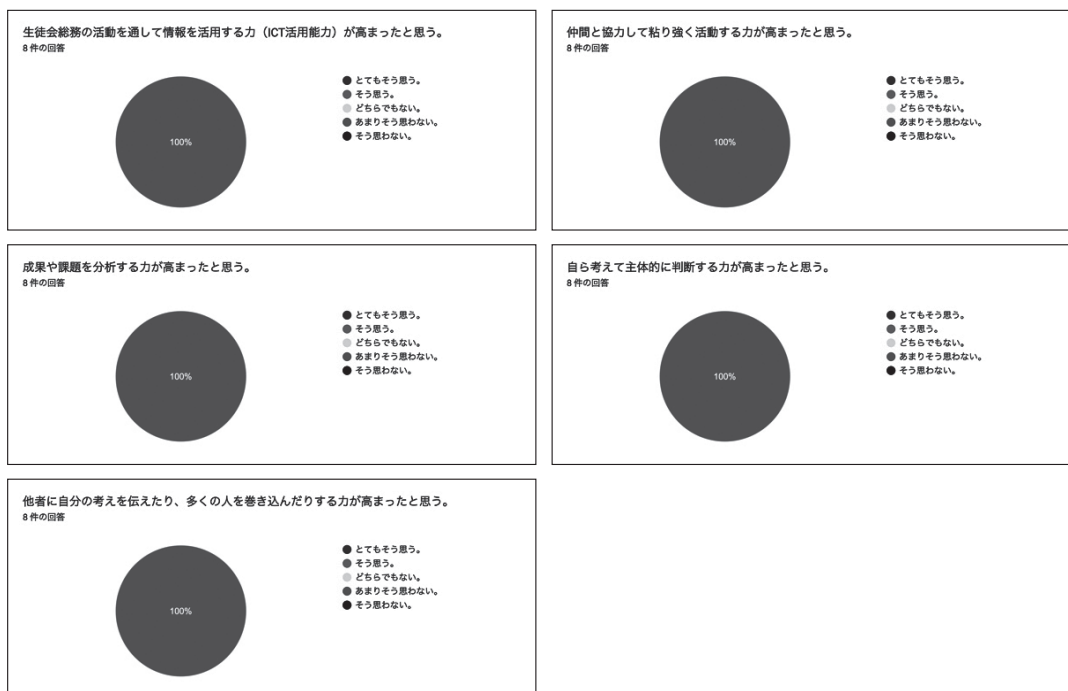


図17. 生徒会総務を対象としたアンケートの結果

この取り組みにかかわった総務の生徒に5項目についてアンケートを行った結果、すべてに高評価を得ることができた。具体的には「3: 他者に自分の考えを伝えたり、多くの人を巻き混んだりする力が高まった。」と「5: 自ら考えて主体的に行動する力が高まった。」の質問項目に関しては、全生徒が「とてもそう思う」と回答する結果が得られた。このことから、本実践を通して、特に「他者を巻き込み行動する力」や「情報活用能力」といった「課題発見・解決力」において、生徒自身も自らの力が確実に伸びていることを自覚していることが分かる。今後、このような取り組みを広げ、本校の生徒全体並びに近隣の中学校にも学びを波及させていきたいと考える。

(2) 講師が「生徒」の職員研修

本校の総務を中心とした実践は、那覇市内の多くの学校に影響を与えている。それを示す象徴的な事例が、那覇市生徒指導主事連絡協議会への生徒の参加である。生徒指導主事連絡協議会とは、市内の小中学校の生徒指導主事が一堂に会し、生徒指導に関する先進的な事例を共有する場である。この協議会に本校の総務が講師として呼ばれたのである。研修会の中で生徒は、各学校の生徒指導主事に向けて校則改正の意義やその実現に向けた具体的な方法について説明を行った。その時に使用したスライドと実際の様子が以下の通りである。20分の持ち時間の中で、校則改正が学校にもたらす利点を自らの言葉で熱く語っていた。

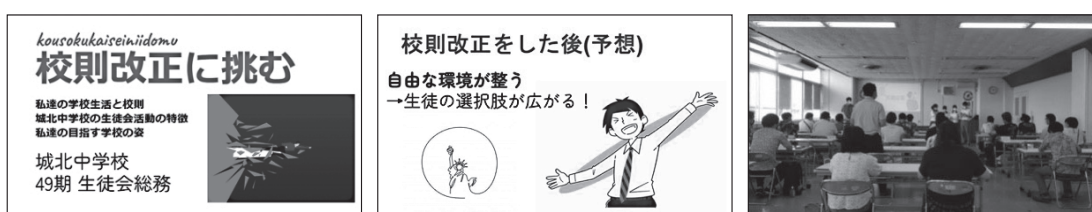


図18. 生徒指導主事連絡協議会で使用した発表資料と講演を行なっている様子

また、講演後の質疑応答の場面でも、自らの考えを丁寧に説明していた。特に、「校則を変える上での基準は何か」という質問に対し、具体例を示しながら「スカートの長さは健康に影響しない。だから変える必要はない。しかし、眉剃りや髪型に関しては人権に影響する。だから検討する必要がある。」と堂々と述べていた。この発言からも、本校の総務が自ら行っている取り組みに対して、一人ひとりが明確な答えを持ち合わせていることが窺える。本校の総務の堂々とした立ち振る舞いに驚いている職員が多く、質疑応答の最後は大きな拍手で締め括られた。

(3) メディア掲載と他地区の学校との交流

生徒指導主事連絡協議会への参加は、沖縄県義務教育課のHPに「ICTを活用した先進的な事例」として紹介された。また、校則改正に向けた一連の取り組みは、県新聞(沖縄タイムス、琉球新聞)にも大きく取りあげられ、他地区の学校にも影響を与えている。



図19. 沖縄県義務教育課「ICT活用実践事例サイト」掲載

その具体例として、国頭地区の伊是名中学校との交流が挙げられる。伊是名中学校は那覇から112km離れた本島北部の離島に位置する学校である。この伊是名中学校の職員が新聞記事を見て、何か交流活動ができないかと本校に連絡をして下さったのである。

それを受けて、夏休みの一週目に二校合同の会議を開催することが決定した。議題は「城北中学校の運動会の種目を考えよう」である。この日のために片道3時間をかけ伊是名中学校の生徒が本校に来校した。当日は、伊是名中学校の6名の生徒と本校の代表生徒40名が8グループに分かれて話し合い活動を行った。会議の司会進行も二校の生徒が協力して行い、大変活発な議論が行われた。後日、伊是名中学校の代表生徒から以下の文面で連絡を頂いた。



図20. 合同会議の様子

先日はリーダー研修に参加させて頂きありがとうございました。
ものすごく充実した話し合い活動の中に伊是名中学校の生徒も一緒に参加できて、とても嬉しかったです。また、研修で学んだことを、伊是名中で挑戦していきたいと思います。是非、伊是名の方にもいらして交流できることを楽しみにしています。

上記の内容からも、夏休みに開催した二校合同の会議が伊是名中学校の生徒に前向きな影響を与えていることが窺える。さらに9月には、那覇市生徒会主任研修会の講師依頼の連絡も頂いている。もちろん、この研修会の講師も本校の総務である。このことから、これまでの実践は本校の生徒の「自律」と「自治」の力を育むだけでなく、那覇地区内外の多くの「生徒」「職員」「学校」に新しい風を送り込む先進的な実践だと考えられる。

4 今後の課題

一方、本実践にも以下の三点において課題が残ると考える。今後はこの課題を解決していくための手立てを検討していきたい。

(1) 外部からの情報収集による生徒のメタ認知能力の向上

「自律」と「自治」の実現に向けて、必要な力の一つである「情報を活用する力」には、有益な情報を集め、それを自分なりにアレンジする能力も含まれていると考える。しかし、本実践では、情報を発信することに重きを置きすぎてしまい、生徒が外部から情報を得る機会が少なかったように感じる。このことは、生徒の自己評価にも影響を与えている可能性がある。本研究のアンケート調査では、多くの生徒が全ての項目において「とてもそう思う」と回答している。これは大変喜ばしいことである反面、生徒自身が客観的な評価を行えているのか疑問も残る。本実践の評価は生徒による個人内評価で行っているが、その評価の根拠となるものは、自らの感覚的なものだけでなく、周囲と比較した視点も重要であると考え。もしも、他校の実践を知る機会があれば、自分達の取り組みの改善点が見えてくるかもしれない。また、魅力的な実践を知ることにより、そこから生徒が刺激を受け取って、今後の取り組みに還元することもできるだろう。従って今後は、他校の生徒会がどのような実践を行い、その取り組みを通してどんな力を高めているのかを実際に生徒に見せたいと考えている。

(2) 継続的な実践に向けた土台づくり

城北中学校の生徒会活動が活発になったのは3年程前からである。前任の職員が様々な仕掛け・働きかけを行い、生徒の「自律」と「自治」の力を高めてきた。総務を中心とした取り組みは学校全体を活気づけ、多様な面から生徒の活躍を後押ししている。今年度もそれを引き継ぎ、生徒の目標である「自ら気づき 考え 行動する生徒」の育成に向けて日々の実践を重ねている。しかし、職員が変わるとその実践が途絶えてしまうという話しもよく聞く。そこで課題となるのが、「実践の継続性」である。実践が形骸化したり、その目的を見失ったりしないためには、「職員から職員」ではなく「生徒から生徒」へと実践が引き継がれるシステムが必要である。ここで注意したいのは、このシステムを作るのは職員ではなく、生徒自身であるということである。そもそも、生徒に「自律」と「自治」の力が育まれていれば、職員が変わってもその取り組みは継続されるはずである。取り組みが年度を重ねるごとに下火になるのは、そこに「自律」と「自治」が存在していなかったためである。だからこそ、日々の実践から生徒だけで考えて行動することが重要なのである。繰り返しになるが、職員が手をかけすぎないようにすることが「生徒から生徒」へと実践が引き継がれる鍵である。現在、生徒は来年度に向けた記録簿やマニュアルの作成を行なっている。上記の点を意識して、生徒の様子を見守り、適切なタイミングで助言や支援を行いたいと考える。

(3) 教員の支持的風土づくりと子ども達の学習観の転換

子ども達を中心とした実践には、失敗がつきものである。また、計画段階での構想や根回しが甘く、情報伝達や指示に遅れが出る場合も多々ある。何より、教員が行事を運営するよりも何倍もの労力が必要となる。しかし、そこで得られる成果には、他に変え難いものがある。学校行事の企画・準備・運営を通して子ども達に育まれる力は計り知れない。ここで重要となるのが、教員の支持的風土の形成である。教員一人ひとりが子ども達の考えや行動を積極的に認め、支援していく雰囲気が必要不可欠である。失敗を責めるのではなく、できたことを積極的に認めていくからこそ、子ども達は次の取り組みへと果敢に挑戦していくのである。そのためには、教員に学習観の転換が求められると考える。具体的には、子ども達が「挑戦することは楽しい」「将来のために挑戦し続けたい」などと「自分自身の力で学びを獲得していく過程」こそ「学習」であるといった共通認識が必要である。そのように考えると、教員は子ども達から「問い」を引き出し、教育活動をファシリテートする役割に回る必要があると言える。忙しさを理由に子ども達の自由な発想と活動の幅を狭めてはならない。校務分掌や専門性の垣根を超えて、前向きに教員同士が連携し、活動を支援していくからこそ、子ども達の「自律」と「自治」の力が高まるのではないだろうか。従って、今後はこのような雰囲気づくりにも尽力したいと考えている。「全ては、子ども達のために。」

5 参考資料

- ・ 沖縄県教育庁 義務教育課 『R4 沖縄県版 魅力ある学校作りパンフレット』
<https://www.fureai-cloud.jp/kochinda-es/attach/get2/1685/0> (2022)
- ・ 工藤勇一 『自律する子』の育て方 SB クリエイティブ株式会社 (2021)
- ・ 多田慎介 『目的思考で学びが変わる』株式会社ウェッジ (2019)